

槿花一朝の夢

田中 今日には長い時間をお取りいただき、ありがとうございます。私が聞き役になりましてこれから大平さんにいろいろなことをお尋ねしたいのですが、この対談の狙いは、政治家大平正芳といいますが、いやもっと広い意味での人間大平正芳の素顔とか、あるいは生地をこの際、大いに一般国民のみなさんに知ってもらおうという点にあります。したがって、ありきたりの建て前論ではなく、本音をどしどし出して頂き、大いに喋り、かつ語ってもらいたいと思います。

いずれ日本の総理の座につくべきお方でしょうから、私としても国民の立場からいろいろと聞きたい問題が一杯ありますが、一応整理いたしまして、まず国内の経済問題、つぎに国際問題、それから国内政治の問題、そして防衛問題、文化、社会、教育とか、そういった柔らかい問題もござりますし、さらに大平さん個人の人生観、読書、哲学、友人など、精神形成の方面にも多角的に触れていただきたい。

それから、あまり当面のドロドロした政局問題には触れないということと、もう少

長い目で、〝日本をどう想うか〟また〝日本をどうするか〟ということを中心に聞きしたいわけです。つまり政治家大平が、日本の現状をどうみているのか、さらに将来どのような選択を、わが国はなすべきかというようなことをお尋ねしたい。

そこで、まずはじめに経済の問題に入りたい。結局国内の政治情勢にしても、その基盤としては経済情勢いかんでしようから。今までわが国は高度成長ですうとやってきて、それが昭和四十八年の石油ショック以降は、成長軌道が大きく変わってしまった。いわゆる安定成長時代に入ったんだということで、福田総理などは安定成長論の代表的な存在だと思います。

それからまた、かつては高度成長論を主張されていた下村治さんが、最近ではむしろゼロ成長ということ、日本経済の前途に対し非常に厳しい見方をされている。そこで大平さんの日本経済の潜在的可能性といいますが、一体もう二度と再び、かつての高度成長というのにはできないのか、あるいはまた、できるとしてもやるべきではないのか、そのあたりの日本経済の成長可能性についての考え方をお聞きしたい。

大平 私 は日本経済の基礎は全く変わったと思うんです。ここ数年前から今日まで。

田中 石油ショック以降というわけですね。

大平 それよりちょっと前からですね。

田中 昭和四十六年にニクソン大統領がドルと金の交換性を停止しましたが、それ以降、世界経済は変わりましたね。

大平 つまり高度成長を支えておった基盤が壊れてしまったんです。その一番典型的なものは、ドルのゴールドオフです。金からの離脱です。それで通貨の価値基準がなくなつたんで、世界経済がハイウェイから一転して泥濘の道に入り込んでしまったわけです。それから資源の供給、価格面の安定が失われた。石油価格が一挙に四倍にも五倍にも、急に上がつてしまつたんですから、それは大へん無茶なことで、いわば世界経済はおもちや箱を引っくり返したような混乱に陥つてしまつたんです。

それに石油や資源の価格が減茶苦茶に高くなつても、量的に安定供給が受けられるかという点、そういう保証もないわけで、価格、供給両面での不安定が発生した。各国間の経済力の格差も拡大し、世界の交易関係は著しく不安定になつた。しかもインフレと不況の混在するスタグフレーションという事態に世界経済は追い込まれて、そ

ここからの脱出のメドが、全然立たなくなってきたわけです。

そして、今では世界の経済は、情性で動いているに過ぎない。基礎が壊れかかっているんだね。これは、ほんとうにえらい時代に入っていると思うんです。だから私は、もう『経済成長』という観念でものをみるのは間違いないかと思えます。そんな、なまやさしい事態ではなくて、経済時代は終わったという見方をしないといけないんではないかと思っています。つまりわれわれは、歴史の中で本当に僅かな期間、一時的に驚異的な経済的奇跡を生んだけれども、あれはまさに權花一朝の夢であつたと。たまたまそういう条件があつて、そこへ優れた技術上の発明や発見が出たりして、あらゆる好条件が、ちようどうまくミートし、遅しい成長を記録する時代を持つことができた。しかし、そんな時代、もうすんだように思えます。

今からの問題は成長というよりは、現在われわれがエンジョイしている生活の物質的条件というものを、どうしたら維持することができるかということが最大の課題となつてきた。つまり、ここまで持つてきた生活水準を、どうしたら維持できるだろうかということに全力をあげ、それにどこまで成功するか、それがわれわれの最大の問

題ではないかと思っっている。そのことのために政治は全力投球すべきではないかという感じですか。それで、そういうことを一方において考えながら、もう一方の大きな反省、すなわち、われわれはこれまで経済というものに、不当にアクセントを置き過ぎておつたが、それを 経済時代 ということにすれば、そういう時代から文化の時代、あるいは宗教の時代というか、そういう時代への移行について考えるべきではなからうかと思っております。

つまり生活水準を高めるとか、より便利な生活をするとかは、そんなに尊いことではなくて、もっと大事なこと、目にみえない生きがいというものが、ほかに何かあるんじゃないだろうかと考えるべきです。たとえば、文化価値、つまり芸術とか、文化とか、体育とか、それから、まあ法悦とか……。

田中 これは宗教的なものですね。

大平 そういうような文化の世界に、何か私どもの生きがいがある。そういうものを発掘する時代に日本はきたんではないか。肥った豚よりやせたソクラテスの方がいいんだと昔の東大総長が言われたことを、もう一度考えてみる必要があるはしないか。

「シンプルライフバットハイシンキング」、そういうような生き方をこれからは人生の指針として生きる時代、そういう時代がきたんではなかるうかと思っっています。

この間、そんな話をしていたら、突然、歌を思い出しました。川田順さんの歌でね、「法律経済などはもち取りの、かかずらわしき学問と思え」という歌です。

田中　そういう歌がありますか。いかにも川田さんらしい歌ですね。

大平　彼は皮肉にも法学士で、住友の重役になったんだが、(笑)結局、歴史を勉強し、歌をよみ、文学に親しんで、その生涯を終えた。もう経済成長などはもち取りの、かかずらわしき事柄と思えということでしょうか。(笑)

田中　そう言われると、ちよっとつぎの質問をしにくくなるんですが。(笑)経済の時代はもう終わったと、これは非常に大事なことだと思っのです。つまり戦後の二十年代というのは、日本人は経済の復興ということに全力をあげてきました。何とか十分な飯が食いたいということできたと思っのです。これが三十年代に入って、いよいよ成長路線にのった。それから四十年代の半ば頃までは、ずつつと高度成長でやってきた。まあ、四十年代の後半になると、ニクソンショックもあるし、石油ショック

もあるということ、日本経済がガタビシしてくるわけですから、しかし、とにかくここまで生活水準が上がってしまったということは、おそらく日本の歴史の上で、初めてですね。これはいろいろ批判もあるが、高度成長政策の一つの大きな成果だったと思います。

そうすると、経済というのは成功すればするほど、経済的な価値というものは下がってくる、自らを否定するという役割があるんじゃないでしょうか。物が豊かになれば物の値うちは下がってくるという。まあ、物よりはもっとスピリチュアルなものが欲しいというようなことで、今、大平さんが、言われたように、精神的なもの、つまり宗教的な、あるいは文化的なものということになってくる。これはもう人間というもの、そういうふうにてできていると私は思います。

大平 この前テレビで中国と日本の女子のバレー、それからソ連と日本の男子のバレー試合を見たが、もうあの眩々相摩す肉体と精神のぶつかり合い、あのファイト、ダイナミックな動き、あれは美しかった。もう本当にうっとりした。実にすばらしいと思った。ああいうところに、われわれの本当の生きがいを感じますね。

頭脳立国へ

田中 今、われわれが享受している生活水準はかなり高いんで、いかに今後これを維持していくかということが、一つの大きな課題になると思うのですけれど、日本の経済をみる場合に、量的な成長というのは非常に大きくて、GNPでみるとアメリカについて自由世界で第二位です。一人当たりの国民所得水準も今やドル換算すると、円レートが上昇したためにアメリカの水準に非常に近くなってくる。

ところが、質的にみて、たとえば資源の問題、食糧の問題、そういう問題を考えると、日本はかなり外国に依存して、いざというときに果たして本当にそういうものが確保できるかどうか。いわゆる経済的安全保障ということでは、非常に脆弱で弱いという感じです。まあ、プレジンスキーじゃないけれど、日本経済は「ひ弱な花」という点も指摘されています。そういう経済基盤の問題ですが、たまたま世界に平和が続いたとか、日本人が一所懸命努力して働いたとか、いろんな有利な条件が重なったた

めに、今日のようなGNP大国になり得たけれども、一步翻つてよく考えてみると、日本経済の基盤は脆弱で、資源も何もないじゃないかという意見があるんです。外形ばかり大きいけれども、いざというときには非常にもろい国だぞ、という指摘がある。この辺はどうでしょう。

大平 もともと日本は、そういう国じゃないですか。わが国には資源はないんだし、なけなしの資源もだんだん減耗している。そういう中で高度成長を遂げたんです。それは外から資源を購入することができた、しかも安定した値段で必要な分量をいつでも買うことができた、そして地球大の市場を開拓することができた、その上に日本人の労働力、技術力、経営力が加わってやり遂げたことなんです。

今度は、そういう条件の大きな部分が崩れたとなったら、頼みは、われわれの技術や経営上の能力です。そして限られた資源をわれわれがどうして確保し、活用して、生活水準を維持するか、そういう工夫をわれわれはしていかなければならない。だから、そこはもう嘆いてみるもはじまらない。そのように諦観してやっていくことです。そうすれば、それなりに道は開けてくるに違いない。

田中 それからこういう高度成長を支えた力として、日本人の勤勉な点もありますけれど、同時に日本の企業、具体的にいうと、自由企業体制といいますが、そういう制度がかなり貢献していると思うんです。これは経営者の力でもあるわけです。ところが最近の社会をみていると、企業批判の声、とくに、いわゆる大企業体制に対する批判の声が、日本だけではなくて世界的にも高まってきた。「くたばれ、大企業！」とか、「くたばれ、大産業！」といった声が強まっている。もっとも最近は一時ほどのことはありませんが。

大平さんはこういう自由資本主義經濟というか、つまり民間の私企業を中核にして、市場において競争をし、お互いに切磋琢磨して技術革新を遂げるとか、いい品物を安く売り出すとか、そういうことによつて基本的に伸びてきた經濟体制。こういう自由資本主義体制というのは、自民党にしてみれば、これからも大いに伸ばしていかなばならないということでしょうし、なるべくそういう民間の力というものを尊重し、それに任せて經濟を發展させていく、そういう考えだろうと思うんです。それに、かつて通産大臣の頃に、ここまで大きくなった民間の經濟界に対して、政府とか役所は、

あまりあれこれ干渉すべきでないということをやったというように、私は記憶しているんですけど、それは今でも考え方にお変わりはありませんか。

大平 ええ、変わりないです。日本人は自由経済体制の中で、飽くなき利潤を追求すエコノミックアニマルであるという人もいるが、こんなことは大間違いです。日本人は大へん心得た民族でね、獲得至上主義というような貧欲な民族じゃないです。立派な企業はたくさんあるし、経営力が優れ、信用力のある企業もたくさんあります。そして内部に入ってみると、まずトップマネージャーをはじめとして、みんな非常に控え目な、自らの生活を自制して、そして企業のために、社会のためにということを一途に考えておる方々です。

それで共産党の人なんかは大企業の横暴をよく言いますが、一つの攻撃のスローガンとしては、あるいは有効かもしれないけれども、実際はそうではないと思います。むしろ逆に、そういう企業人達を政治は少し抑えすぎているんじゃないかなと思うか。もっと自由を与えてやる方がいいんじゃないかと私は思うくらいです。

それからまた、貧富の差がこんなに少ない国は、おそらく資本主義圏はおろか、社

会主義圈を加えても、世界中で珍らしいんじゃないだろうか。日本ではともかく、どの組織をみても上と下との差は少ない。企業においては特にそうです。むしろ悪平等といえるぐらいじゃないですか。決して行き過ぎたことをやってはおりません。もう少し公平にものをみるべきだと思います。

欧米人こそ、エコノミックアニマル

田中 それから、戦後の日本人というのは、食うため、物を作るということに全力を注いできました。それで、一億すべてエコノミックアニマル、あるいは、一億総ピジネスマン的な国民になったといわれている。そういうことで海外からの批判も日本人という、すぐエコノミックアニマルだという批判が出てくる。正直言ってこれだけ生活水準が高くなると、いったん確保した、この生活水準を何としてでも維持したいという気持ちがかかなり強くできて、これからはますますエコノミックアニマルぶりを発揮するのではないでしょうが。

私はこの間英国へいきまして、保守党のヒースさんの話を聞いたのですが、ヒースさんが、「われわれのみるところによると、日本人は世界で稀にみる急速な経済成長をやりとげた、日本人の生活水準は急激に上がった。このあまりにも短い間に上がった生活水準だから、今度は逆に非常に短い間にそれが失われてしまうんじゃないか」ということを懸念して、ガムシヤラに働いているんじゃないかという感じがする」と、こういうような批判をされておったんです。どうでしょうか、そういう点は。

大平 まず第一に前提として、日本人はエコノミックアニマルであるという説に私は反対ですね。日本人はそんなお粗末な民族じゃない。私は逆に、欧米こそエコノミックアニマルだと思うんです。

田中 本質的にいえばそうでしょう。金とか物に対する欲望は彼らの方が強いですから。

大平 欧米人は経済に対して欲望が強い。そしてケチです。ところが日本人というのは、「江戸っ子だ。宵越しの金は持たん」とか言って、極めてあっさりしている。(笑)

田中 経済的合理性がない。

大平 合理性が乏しい。花鳥風月を愛でる雅致を心得ている。また貧乏人のくせに
気前がいい。

田中 こんなに気前のいい国民はない。海外へいっても、パツパと金を使つてく
る。

大平 そんな国民が、經濟的動物だなんて言えたものではないです。エコノミック
アニマルなんて、おそろしく日本人の実態から離れていると思います。それからまた、
現に非常にガムシヤラに働いているかというと、日本人はそんなにガムシヤラに働い
ているように思えない。むしろ欧米人の方が拘束時間内は労働密度が高いように思う。
日本人の方はそんなに無理はしていません。だから、どこからそんなエコノミックア
ニマルだなんていう神話が出たんだろうか。不思議に思えてならない。

やっぱり日本は四つの島から成る細長い国で、どこからも海岸に近い。そこで海岸
に工場が立地して、輸送コストが小さくてすむ。海運はタンカーにしてもカーゴにし
ても大型化し、規格化されて、人件費、その他のコストがいくら上がっても、逆に、
単位あたりの運賃コストが下がってきた。

つまり日本という国は、一番安く資源が利用できた国です。そこへ戦争のために、幸か不幸か、古い従来の設備は破壊されてしまい、そうして新しい技術を具体化した新鋭の機械設備が導入された。これでは古い設備を大事にしている国々は、日本とは太刀打ちにならない。

それから労働賃金にしても、日本はチープレイバーだと言われたのは昔の話であって、今は毎月の月給ばかりでなく、退職金からはじまって、いろいろの福利厚生施設、その他のベネフィットコストは相当高くなっている。むしろアメリカに匹敵するようになっていないか。ヨーロッパより高いんじゃないでしょうか。

田中 フリンジベネフィットというものを全部入れてドル換算した場合は、おそらくそういうことになりますね。すでにヨーロッパを追い抜いてしまった。米国に迫っている。

大平 そういうことになると思います。しかも、わが国の雇用制度は、年功序列であり、終身雇用であるわけです。どうして日本人をエコノミックアニマルと言えませぬか。

田中 大平さんは一橋を出られましたし、その前は高松の高等商業を卒業されている。そこで、経済学とか経済思想史とか、そういうものを学生時代に学ばれたと思うんです。私も実は経済学をずっとやってきました。それで感じたことは、経済学というのは、やはりアングロサクソンが主流となって生み出したものだということです。特に英国が主流でアダム・スミス、ケインズなどがそうです。ところで、日本人といふのは淡泊な国民だし、儒教の影響なのか、物欲はあまりない。貧しいということもあって、まあ、比較的勤勉でしょうけれども、金銭欲とか物欲は、非常に薄い。

ところが戦後、とにかく物だとか、経済成長だとかということやってきたものだから、表面的にはいかに経済に一番ウエイトを置いた国民のようにみられているけれど、本質的には、今ご指摘のようにそうではないという感じがするわけです。